Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

5/18
Ⅶ-708

乳幼児保育における保母の疲労調査

跡見 一子　　○宮崎 照子
東京家政大学　　東京家政大学ナースリー・ルーム

◦はじめに

私たちは乳幼児保育を行なつている立場から、保育中の安全について研究し、保育中の保母の疲労、子どもの疲労が事故につながるのではないかと考えて、保母、子どもの疲労調査を行ない、先の本学会において発表した。

保育の現場において、保育にたずさわる保母の疲労にはいろいろな因子が考えられるが、その一つには保育する子どもの年令と発達段階による差と、保母の受持ち幼児数との関係にもよるちがいがあることは既にいろいろ発表もされている。ほかに保育時間、保育の方法、保育する場の環境条件などいろいろの要因でかわつてくると考えられる。また、保母個人の年令、健康状態、性格、未既婚、経験年数、職場の人間関係などによつてもちがいが生ずると考えられる。

今回は、乳幼児保育を行つている保母のうち、0才児（1才児）を担当する保母と、年中児（3才・4才児）を保育する保母を対象にし、両才の保母の疲労に相異があるかどうかを調査した。

◦調査方法

1975年2月における疲労の自覚症状調査を実施した。

対象は、東京都豊島区の公立保育所24園において、乳児担当、幼児担当の保母を各1名づつ計48名について、記録を行つた。

方法は、自覚症状の調査項目として、産業疲労委員会の選定した「新しい自覚症状しらべ」(1967)に出された30項目を用いて、Ⅰ.身体的疲労（特にねむけとだるさ）、Ⅱ.精神的疲労（注意集中の困難）、Ⅲ.神経・感覚的疲労（局在した身体的違和感）との10問ずつに分け、更に各群に総合したネガティブな症状として、項目別に、(a)体の調子がない、(b)気分がすがすがしい、(c)体のどこにも異常を感じない、などの概評を加えた。ほかに、前夜の睡眠時間、通勤時間、仕事の内容、その他体の異常、疲労をおこす出来ごとなどを特記してもらつた。

この調査を1日3回、仕事にかかる前と、中間と仕事の後とに1週間連続して○×式で記入してもらい、記録用紙は前に書いた応答がその後の応答に影響することがあるので、記載の都度、回収した。

◦調査結果および考察

保母の疲労自覚症状の調査は1日3回延851回の記録をとり集計・整理した結果は、

1. 各症状の頻度の比較

表1.　乳幼児の保母の疲労の延日的頻数

	項目 ＼ 曜日	月	火	水	木	金	土
	人員	142名	142名	147名	137名	138名	145名
	度数	%	%	%	%	%	%
Ⅰ	1 頭がおもい	20.4	23.2	15.6	26.3	13.8	22.8
	2 全身がだるい	21.8	26.8	25.9	34.3	36.2	31.7
	3 足がだるい	15.5	21.1	22.4	27.0	33.3	30.3
	4 あくびがでる	23.2	27.5	32.7	27.0	24.6	26.9
	5 頭がぼんやりする	24.6	32.4	27.9	33.6	20.3	26.2
	6 ねむい	28.9	37.3	33.3	22.9	38.4	34.5
	7 目がつかれる	33.8	33.1	35.4	38.0	37.0	34.5
	8 動作がぎこちない	6.8	4.9	4.1	4.4	6.5	10.3
	9 足もとがたよりない	4.2	2.1	4.1	4.4	7.2	8.3
	10 横になりたい	21.8	33.8	30.0	29.2	41.3	26.9
	Ⅰの平均	19.1	24.2	23.1	24.7	25.9	25.2
Ⅱ	11 考えがまとまらない	9.9	18.3	14.3	18.2	15.2	15.9
	12 話をするのがいやになる	12.7	15.5	1.1	11.7	12.3	10.3
	13 いらいらする	12.0	14.8	5.4	19.7	11.6	9.0
	14 気がある	12.0	12.7	8.8	11.7	11.6	15.2
	15 物事に熱心になれない	14.1	16.2	11.6	14.6	12.3	13.8
	16 ちょっとしたことが思い出せない	12.0	15.5	11.6	13.1	18.1	15.2
	17 することに間ちがいが多くなる	7.7	9.2	8.2	0.7	4.3	7.6
	18 物事が気にかかる	9.2	13.4	5.4	13.9	15.2	15.9
	19 きちんとしていられない	4.9	4.9	6.1	0.7	5.8	9.0
	20 根気がなくなる	12.0	15.5	15.0	17.5	13.8	16.6
	Ⅱの平均	10.1	13.6	8.8	12.3	12.0	12.8
Ⅲ	21 頭がいたい	14.8	14.8	12.2	16.8	12.3	11.7
	22 肩がこる	41.5	50.0	38.8	42.3	46.4	46.9
	23 腰がいたい	38.0	44.4	36.7	35.8	34.8	36.6
	24 いき苦しい	4.2	2.8	3.4	0.7	6.5	9.0
	25 口がかわく	26.1	24.6	19.0	18.2	21.0	14.5
	26 声がかすれる	19.0	16.9	23.1	22.6	23.2	15.2
	27 めまいがする	1.4	0.7	2.0	2.2	0.7	0.7
	28 まぶたや筋肉がピクピクする	12.7	8.5	10.2	15.3	10.1	10.3
	29 手足がふるえる	2.1	1.4	2.0	0.1	2.9	1.4
	30 気分がわるい	5.6	6.3	5.4	4.4	6.5	10.3
	Ⅲの平均	16.5	17.0	15.3	15.8	16.4	15.7
	Ⅰ, Ⅱ, Ⅲの平均	15.2	18.3	15.7	17.6	18.1	17.9

NII-Electronic Library Service

Japan Society of Research on Early Childhood Care and Education

自覚症状の項目別平均は全体の

Ⅰ群 身体的疲労 23.7 %

Ⅱ群 精神的疲労 11.6 %

Ⅲ群 神経感覚的疲労 16.1 % であった

訴えられた疲労は、身体的疲労が多く、前回の調査と似ているが、Ⅲ群の神経感覚的疲労が多くみられ、疲労の項目は集中していた。

2. 逐日的傾向

保母の疲労自覚症状の逐日的頻数は表1の通りである。月曜日の疲労は休日あけで、他覚症状調査（フリッカー・タッピング・唾液P.Hなどの疲労計による）ではやや多かったのに、ここではそれほどあらわれていず、1日経過して、火曜日に疲労がみられ、水曜日は少くなり、木曜日・金曜日と漸次蓄積されて増大している。土曜日は自覚症状の特徴で仕事が終りに近ずくので午前中は少く、午後に仕事から解放される前に頻度が高くなっている。

3. 作業別 傾向

0才児の担当保母と幼児担当保母の疲労の自覚症状の上位から3位の訴えを比較すると次の通りである。

表2. 担当別 自覚的疲労症状の順位

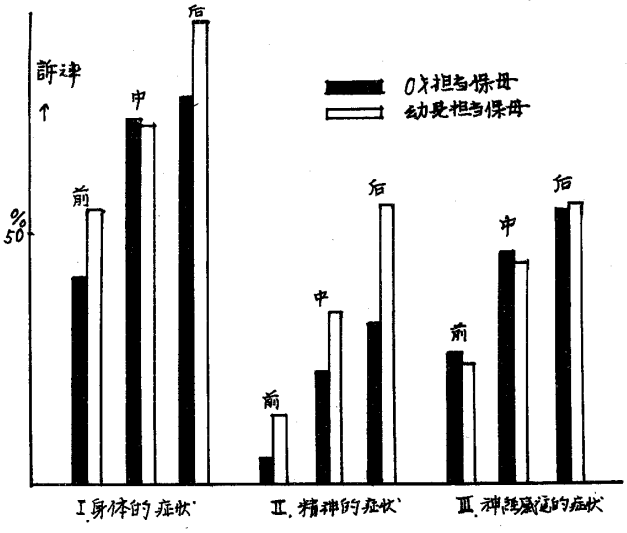
	0才児担当の保母	幼児担当の保母
Ⅰ 身体的症状	・あくびが出る ・ねむい ・目がつかれる	・目がつかれる ・全身がだるい ・ねむい
Ⅱ 精神的症状	・物事が気にかかる ・気がちる ・物事に熱心になれない	・考えがまとまらない ・ちょっとしたことが思い出せない ・物事に熱心になれない
Ⅲ 神経感覚的症状	・肩がこる ・腰がいたい ・口がかわく	・肩がこる ・腰がいたい ・口がかわく

訴え率の高いものは肩がこる、腰がいたい、目がつかれる、ねむい、などの項目で共通しているが、担当児により上位3位の疲労の訴えの傾向に特徴があった。身体的症状では0才児は全身体に疲労を感じ、幼児担当では目のつかれを圧倒的に訴えていた。精神的症状では0才児担当では小さいことに気がつきやすくなり、幼児は考えることを中心に疲労が目立っている。神経感覚的症状は両者とも全く一致していた。肩こり、が40～48%もあり、腰のいたみは35～40%にみられた。ほかに口がかわく、まぶたや筋肉がピクピクする、というのも共通して訴えている。

作業別傾向として担当のみを重視したが、担当の中でも複数制を採用している保育所では、リーダーとサブとでは作業内容が可成りちがうので、もう少し検討されるべきであるが、ここでは特別なものを除いて平均的なものを扱った。

4. 担当別、保育時間経過の疲労頻数

0才児担当保母と幼児担当保母との仕事の前、



仕事の中、後の疲労の頻数をみると上の図の通りであった。保育時間の経過に伴って各群の平均訴え率が増大する傾向があきらかにみとめられる。

そのほか、保母の経験年数別、年令別にも検討してみたが経験年数の少い保母は疲労が高く、神経・感覚的疲労が目だっている。年令は20代がほとんどで30代が少いので、はっきりでないが身体的症状で30代が少いのは職務上からの作業の差がある。

・まとめ

乳幼児保育における保母の疲労は、他の職種より身体的疲労・神経感覚的疲労が多く、逐日的の疲労もさきの疲労計による他覚症状調査の結果と一致していた。

これらを総合すると、保母1人当りの保育児数、こどもへの働きかけ、単独保育と複数共同保育、混合保育と年令別保育などの保育の形態について一層の配慮が必要であり、子どもの疲労や保育者の疲労を考えつつ保育することは事故防止につながり、積極的な安全教育も含めて、よりよい保育に発展するものと考えている。

NII-Electronic Library Service